

「女は粗野な男が嫌いか」というと、かならずしもそうとは限らない。粗野な男が好きという女はいるのだ。しかし、不潔な男だけはダメだ。不潔な男を好きになる女は一人もいない」と。

これは、私の経験からしても絶対的に真実である。

ゆえに、女にモテたかったら、男はなによりも清潔な心がけなければならぬ。毎日、風呂に入ろう。爪を切ろう。鼻毛を抜こう。耳毛を抜こう。髪にクシを入れよう。下着を替えよう。香水をつけよう。

しかし、不潔でないというのは、女にモテるための必要条件ではない。清潔であればモテるというものではないのだ。

モテるためには、この上を行かなければならない。すなわち、オシヤレである必要があるということだ。

だが、男のオシヤレとは何なのか？

これは考えると、意外にわからない問題ではある。自分ではオシヤレしたつもりが、女にはひどく悪趣味に映ることもあるし、あるいはその逆に、オシヤレなんかまったく気にかけないのに、オシヤレと言われることもある。

というわけで、今回は、メンズ・ファッション評論で目下、売り出し中の中野香織さんに、「男のオシヤレ」という問題について話をうかがってみた。

鹿島 私は男のオシヤレに関して、一

鹿島 茂の 女心の研究

第21回

ファッションの専門家に訊く イ女にモテるための 身だしなみとは？

鹿島 茂 = 文
text by Shigeru Kashima
阿部隆 = イラスト
illustration by Ryuichi Abe

うことは、デザインもさることながら、布地の高さです。布地が良いものだったら、それはオシヤレに見える。特に、背広なら。

鹿島 やはり、そうですね。じゃあ、金があつて女にモテたいって奴は、とにかく、良い仕立ての良い布地のスーツを着ればいいってことですね。

中野 でも、それだけで、中身がともなわないと、スーツが歩いているみたいなことになってしまいますよ。

鹿島 なるほど、バブル時代に、漫才師がアルマーニの背広を着てたみたい。でも、中身が具体的にどんなことですか。カラダですか？

中野 そう、体のいい人は何を着ても似合いますね。

鹿島 それ、筋肉マンってことですか？

中野 いや、そうじゃなくて、骨格のバランスのいい人っていう意味。

鹿島 じゃあ、骨格の悪い男には、オシヤレは無理？

中野 いや、かならずしもそうではないんです。だって、デブでもオシヤレでモテる人はいるでしょう。自分がデブだって自覚したうえでオシヤレしてると、けっこうセクシーになるんです。鹿島 対するに、無自覚なデブはダメだと。

ぞ」って意思が見えれば、その人はオシヤレになる。

鹿島 ようするに、気遣一つということですね。これはいいこと聞いた。そういうえば、昔、石津謙介さんにインタビューしたとき、相当の年配であるにもかかわらず、そのオシヤレの気遣が全身からにじみ出ていましたね。

中野 オシヤレだと確信すると、本当にオシヤレになる。要は、自信のあるなしなんです。自信のある人って、それだけでいいんです。何着ても、不思議に似合ってしまう。反対に、自信がない人だと何着ても似合わない。オレ、今日のこれでもいいのかな、組み合わせこれでいいのかなって悩んでる人は、どんな高価なものを着ても、全然アウトですね。

鹿島 でも、ほとんどの男は、オシヤレに自信がないから、男性誌が薦める「モテ服」を選んでしまうんじゃないですか？ 『LEON』の読者がみんな『LEON』に載った服を着るみたい

に。

中野 男の人って、「これがモテ服だ」って言われると、すぐ学習モードに入っちゃって、コードを一生懸命勉強するって方向に進んでしまうんですけど、じつはそれは勘違いなんです。

鹿島 というところ？

中野 男のオシヤレ度が1から10まであるとすると、女はオシヤレ度6くらいの人が一番好感持つんです。逆に、オシヤレ度10まで行つて、やたらにブランドに詳しくなつたりすると、女は

つのセオリーのようなものを持つてゐるんです。それは、安い値段の服でオシヤレするのは難しいけれど、高い服でオシヤレするのは比較的簡単である。ゆえに、手取り早くオシヤレしたかったら、いきなり高い服を買えとまあ、これ以上はないというシンプルなかたえ方です。

この理論は、昔、野坂昭如さんが唱えていたことで、「オレはオシヤレのセンスなんかゼロで、なにがセンスのいい服かそうでないかなんて全然わかん

ない。だから、金が出てきたら、上等舶来の伝で、外国ブランドの高い服を着ることにした。そうしたら、ベスト・ドレッサー賞を貰った」って。

中野 何ともわかりやすい理論ですね。でも、たしかに、それは真実の一端は衝いていますね。とりわけ、女性服だったら、高いものは女を奇麗に見せてくれるから。

鹿島 メンズでは駄目ですか？

中野 いや、そんなことはないでしょう。男性服の場合、値段が高いって

引いちゃうんじゃないでしょうか。
鹿島 ブランド・オタクになっちゃうわけだ。

中野 ファッションのことを書いているわたしが言うっちゃうと、それこそ身も蓋も無いんですけど、本音を言えば、わたし、ファッションの話が得意な男の方が好きなんですよ。そこそこ清潔感があって、ちゃんと身の丈にあったものを無理なく着ているというのが理想ですね。

鹿島 男はオシャレであっても、あんまりブランドのことなんか詳しくない方がいいよ。

中野 少なくとも、お勉強はしない方がいいと思いますよ。オシャレ度が高く、ブランドのことをよく知っているような男の人は、一緒に銀座でショッピングしてる分には楽しくても、それ以上深い関係になれるかというと、そうではない気がしますね。

鹿島 それは言える。オシャレ過ぎる男というのはナルシズムが強いから、自分だけ愛して女を愛さない。女がオシャレ度6の男を好むというのも、そのあたりの事情から来ているんですね。中野 そんなにオシャレに時間とエネルギー使ったら、それをこっちにくれって感じですよな。

鹿島 オシャレなのはいいけれど、オシャレすぎるのは困りものだよ。それに、もう一つ問題があつて、あんまりオシャレだと、おままとボーイになっちゃうんじゃないですか。

中野 おままとボーイならまだいいんですけど、それを通り越してしまっ



鹿島 おばさんボーイだ。
中野 まったく「男」を感じさせない男。おばさん同士の気安さで話ができる。ファッション評論家はほとんどがおばさんボーイですね。

鹿島 となると、周りに女がたくさんいても、その男は全然、モテたことにならない。

中野 女だつて、相手を男だと思っていないから、平気でイヤなところをさらけ出してしまふ。だから、本当に深い関係になつてもいいわつて女が感じる男には、女は自分の方から近寄つて

はいけないものなんです。
鹿島 ふーむ。女が警戒心なしで寄つてくれるアクセシブルな男というのは、じつはモテる男じゃないわけだ。

中野 自分からは寄つていけないけど、向こうから寄つてきてほしいと女が感じるのが本当にモテる男なんですね。

鹿島 それはセックス・アピールの問題とはまた違うんですね？ たえば、胸ボタン三つまであけて、ブルガリのペンダントなんてひけらかしたりするのは？

中野 それって、男の勘違いの最たるものですよ。胸ボタンが三つ開いて、胸毛が見えた時点で、もうサヨナラです。クロスペンダントが二つ重なったりしてたら、最悪。

鹿島 たしかに勘違い系はタチが悪い。オシャレだという自信はいいけど、勘違いは最悪だつてことですね。でも、思い込みつて、ある程度は必要でしょう。ぼくがこれまで見てきたオシャレな人っていうのは、似合う似合わないじゃなくて、無理やり似合わせちゃうって人が多かったから。

中野 そうですと、その強引さがあるかどうか。どういう格好しても、服の方を自分に似合わせちゃう。

鹿島 それって、思うに繰り返してやらないですか。ずっと、繰り返しているうちに、似合わなかったものが似合ってくる。もう、こいつにはこれしかないみたい。

中野 そうなんです。だから、オシャレなんて、究極のところは、その人の個性の問題でしかない。本当は、一人ひとり何着てもいいんですよ。

鹿島 オシャレにはコードはないと。
中野 そう言うっちゃうと、自分の書くものと矛盾してはいるんですけど、規格通りのオシャレをしている男の人ってすごくつまらないですね。規格から外れている人の方が興味をそられる。

鹿島 でも、外すからには規格をいったんは受け入れなければいけない。それに、外すというのは難易度が一番高い。外したつもりで外れてしまつては困るわけですね。

中野 その人の中によほど強烈なものがないと、魅力的な外し方ができないんですな。
鹿島 オシャレたらんと欲すれば、オシャレである勿れ。このあたりが結論ということでしょうか。

なにかのかわり 1962年生まれ。東京大学文学部および教養学部卒。東京大学大学院総合文化研究科博士課程を経て、英国ケンブリッジ大学客員研究員を体験し、服飾史家ニラム・ニストとして活躍。著書「ストリートの神話」(文春新書)、訳書に「性とストリップ」(白水社)など。近著「モードの方程式」(新潮社)は「ワルい男とイイ女のファッション」を考察したコラム集。